

著作集「近代の〈負〉を背負う女」を出した八木秋子さん

東京・池袋から東上線で三つ目の大山駅で下りて五分、都立養育院がある。ここには老衰と死があるだけと人はいう。回想と忘却もある。一室三、四人の雑居生活の中に、八木秋子さんは身をじっと沈めている。

廊下の隅の面会所で会った八木さんは、なんとなく疲れた感じ。

「いまのところ、静養だけ。出版記念会(4月29日)やテレビに出たり、人が来たりで、疲れが一ぺんに出てしまっ」。

メーデーの記念番組に、旧知のインターナショナルの作詞家佐々木孝丸さんと出演、インターをうたった。

「行きがけに車の中で気もちが悪くなって。一歌い出したら二小節目でどうしても声が出なくなっちゃって。こんどくらい年齢を感じたことはないんです。

『近代の〈負〉を負う女』の出版と、去年の7月から始めた通信「あるはなく」に、書くのはわたし一人で、つい過労になってしまっ。六号が出ます。

こういう環境の上に、わたしはもともとスラスラ考えを述べるたちじゃなく、ポチポチ話す方なので、こんどというこんどは、年齢を考えました。通信を出すのに、若い人が集まって手伝ってくれています。みんなわたしから見れば孫くらいだけれど、どういうわけか気もちがあっ。年なんかそっちのけで、よく訪ねてくれます。学生も、労働者、サラリーマン、女の人も」

1895年、長野県木曾福島の生まれ、松本市立女子職業学校を出て、結婚、一児を置いて家を出た。

「娘時代、らいてうの「原始女性は太陽であつた」の感激はいまも生きいきしています。子に別れて家を出たことが、私の第一の出発でした。話し出したら長くなってしまう。

若い人たちと、年齢、時代、道もちがうけれども、何とかうまくやっていきたい。わたしたちの頃は年よりの歴史を知りたいと思ったけれど、いまの若い人は、アッサリしている、刺げきが多すぎるのでしょうか。

60年安保のとき、樺美智子さんが亡くなった翌日、婦人民主クラブの隊列に加わって、日比谷音楽堂からデモに出発したときの興奮—ああいう感激は、あれからはもうなかつた」

大正から昭和のはじめにかけて神近市子のやめたあとの東京日々新聞で活躍、社会運動に参加。アナキズムに接近。長谷川時雨が主宰する「女人芸術」の編集に参加。毎号小説、評論を執筆。29年、7月同誌上に藤森成吉に公開状を發表、それから論争が發展し、12月号まで、高群逸枝などが加わってアナ・ボル論争が展開された。

八木さんは長野県下の農村青年のコンミュニズム運動に関係、逮捕され、実刑2年6カ月。38年、43歳渡満。満鉄につとめ45年敗戦帰国。戦災者、引き揚げ者、孤児の収容施設の職員となる。

この間においてきた一子にめぐり会いその臨終をみとる。

「あるはなく」2号「わが子との再会」に、息子のことばがある。「あなたがどうして家を出て行ったか、帰らないところに行ったかは、ぼく、おやじの人間を知ること、だんだん判ってきたけれども、もう一つのこと、あなたがなぜぼくをつれて出なかったか。そのことをいちばん訊きたかった」

この問いについて母は答えないうちに、息子は急死した。

底辺の生活をつづけ、十年くらい前から清瀬市のアパートに一人住み、執筆と生活保護で暮らしていた。アナキストの評論家秋山清さんは「八木秋子さんは自分の足跡を消しながら生きている」と書いている。

「八十三歳というじぶんの年齢もわきまえ、前途には老衰と死があるだけだと思ふ。その覺悟を肚に据えてまだすべての終焉までにはいくばくかの時間的余裕もあろうし、わずかな能力の残滓も生活のなかに身をおいて老衰と退歩に抵抗を繼續するその闘いの中に、現在の私の生命が光りを得て燃えることもあり得るにちがいない」（「あるはなく」第3号）から

（帆）

近代の〈負〉を背負う女 JCA出版 1300円